

介護 なんでも 相談室



松永安優美 まつながあゆみ
栃木県出身、内科医。埼玉医科大学卒。同大付属病院を経て実家の松永医院に勤務。平成3年から特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、養護老人ホームなどを設立。現在、医療法人「聖生会」理事長、社会福祉法人「裕母和会」会長として、医院と8つの介護施設を運営している。

Q 65歳の定年を機に、同じ年の妻と2人、長野県の過疎地の古民家に移住する計画です。南アルプスが見渡せる風景と、町からの移住者支援金が決め手になりました。東京の自宅は売却処分し、まさに第2の人生として農家生活を始めるつもりです。子供がいないこともあり、退職金と年金、自宅売却資金で、第2の生活のメドは立つと考えています。ただ、心配性の妻は、病気になったときの不便さや老後のことが気になるようです。とくに地方の農村だと、介護施設などはないでしょうから、夫婦のどちらかが動けなくなったときにどうなるのか、不安なようです。農村の人たちは親戚関係や近所の長い付き合いの中で、介護も助け合っているのでしょうか、私たちにそういうものが築けるでしょうか？

A

奥様の不安はことになよく分かりまります。

す。地方といっ 移住先の近所の人たち

でも千差万別でしょうが親切で、いざという場が、まず病院の場所などは助けてくれる。そうはしっかりチェックしてなればベストですが、移下さい。今は健康に自信住先に向まく溶け込めなのある人でも、65歳を過い場合も十分あります。ぎると、転倒して骨折し相談者をご近所づきあいたり、突然の大病に襲わが好きで、お祭りや集会被れることもあるかもしれに参加することを厭わなません。その場合、大きいタイプなら大丈夫ではない病院まで行くのに車でようが、そうでない方な1時間も2時間もかかるら、慎重になるべきでと、大変なことです。ごす。そのためにも、「お主人しか運転免許がなければ、そのご主人が入院近所の人たちと接してみしたりすると、奥様はバることが大事です。

スを乗り継いで看病に通最近、定年後、地方へうことになります。せっ移住し、農業を第2の人かく夢見た田舎暮らし生にする元サラリーマンが、病気一つで台無しにが増えています。好きななってしまうのです。ことをする、生きがい

不便さは病院だけでは持ち続ける。それは非常ないでしょう。特別養護にいいことです。ただ、老人ホームや介護老人保成功者は一部にすぎず、険施設は、人口の割合でテレビ番組のようにはい設置されますから、過疎かないことも事実です。地などでは介護が必要に悟が必要ですよ。

